

# 災害メモリアルアクション KOBE の活動

メンバー：神戸学院大学 現代社会学部 社会防災学科 2 回生 （船木ゼミ所属）

井関晃平・岡本大二・陰平将史・瀬戸絢大・田中航平 谷口太宣（絵）・辻本汐里・松本涼平・光井一成

私たちは、神戸市立明親小学校の長谷川元気先生（語り部 KOBE1995 所属：阪神・淡路大震災当時小学 2 年生で母親と弟を亡くす）のお話を学生が聞いて、お話と絵にして小学生に伝える活動を行いました。

## どうして長谷川先生のお話を小学生に？

ゼミでは、「防災教育」をテーマに命の大切さ、防災の必要性を伝える出前授業を行っています。2015 年 6 月に神戸市立塩屋北小学校の 3 年生に非常持ち出し袋をテーマにした防災の出前授業を行いました。その時に小学生たちに、「阪神・淡路大震災」のあの時のことをイメージしてもらうことの難しさを感じました。



「どうやったら震災を知らない自分たちよりもさらに下の世代に伝えられるか？」  
そこで私たちは考えました。

「子どもたちと同じ世代の震災の体験ならイメージしてもらいやすかもしれない！」  
そこで、授業で話を聞いた長谷川元気先生にお話を聞きに行くことにしました。

長谷川元気先生が勤務されている明親小学校で数回お話を聞きました。



長谷川先生に会うまでに、新聞記事や先生の語りのお話の DVD を何度も何度も聞きました。話を聞いて、もっと聞きたかったことや、私たちがイメージしにくかった部分を質問しました。「弟と 2 人で公園に避難していたときはどんな服装でしたか？ どんな話をしていましたか？」

先生から聞いたことをお話と絵にして伝えることにしました。  
先生も覚えていないところは、みんなで考えました。  
絵にするときにはポーズをとりながら、その時の様子を想像しました。



授業では、やっぱり長谷川先生の「生の言葉」の力をかりたいと、先生の教室でお話を伺い、お話の解説として小学生に見てもらおうDVDも作成しました。



塩屋北小学校の3年生に授業を行いました。小学校の授業では・・・

① 紙芝居形式で私たちが作成したお話から、長谷川先生の被災体験を伝えました。

その時、所々に「この時元気くんは何を思っていたのか」と考えてもらうポイント(3か所)を加え、小学生には元気くんの立場になってもらうしかけを入れました。そして、その3か所を発表してもらった後には、長谷川先生の生の言葉をビデオで伝えました。



授業で私たちが伝えたかったのは、「周りの人の大切さを感じてほしい」ということです。先生はおっしゃってました。「突然大切な人がいなくなって後悔したと。だから、言える時に大切な人や周りにいる人に感謝の気持ちを伝えてほしい」と。

私たちも、大切な人を亡くした体験や命の危険にさらされるようなけがをしたこともありました。その時に感じたことと重なって、「周りの人に支えられて生きていること」を長谷川先生のお話を聞いていて改めて気づかされました。

② ワークシートを作成し、小学生に「自分の周りにどれだけ多くの人がいるか」を考えてもらいました。



③ 最後に、一番感謝を伝えたい人に向けて「ありがとうカード」のメッセージを書きました。



校長先生に、「朝会でいろいろお話をしてくれてありがとう」と書いた子もいました ^^

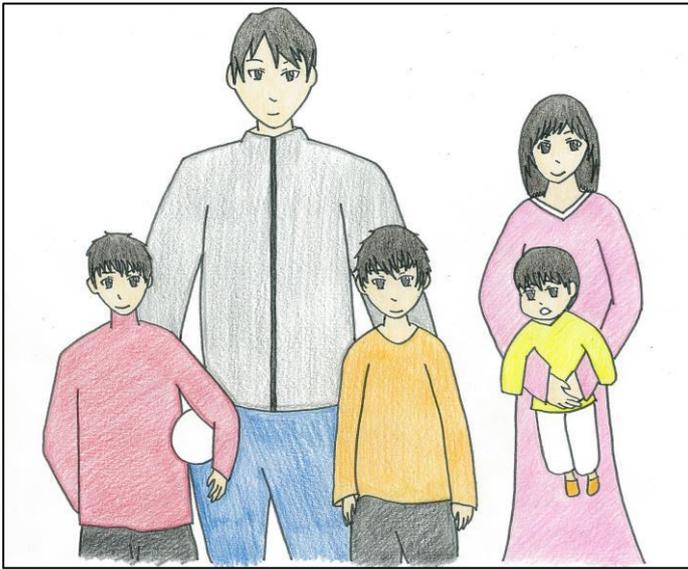
小学生の感想には、「じしんは、いつおこるかわからないので、わたしも、長谷川先生のように家族にできることをしたいです。ありがとうの手紙も、今日、わたしたいです。じしんにあいたくないです。大切な家ぞくをうしないたくないです。いもうとがいなくなったら、さびしいし、お母さんは、おいしいご飯を作ってくれます。お父さんは、会社に行ってくれるし、みんな大好きだからです」と書いてありました。

# 元気くんのゆめ

神戸学院大学 現代社会学部 社会防災学科 船木ゼミ

井関晃平・岡本大二・陰平将史・瀬戸絢大・田中航平

谷口太宣（絵）・辻本汐里・松本涼平・光井一成

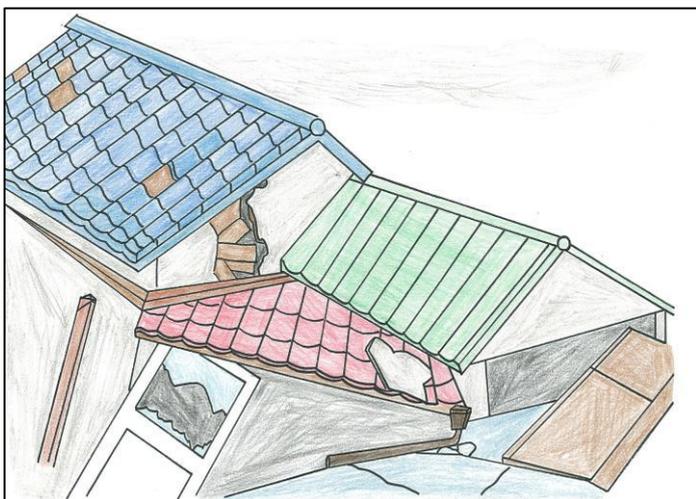


みなさんは、20年前におこった、『阪神・淡路大震災』という、地震をされていますか？このお話は、地震で家族をなくしながらも、強く夢を持って生きてきた男の子のほんとうのお話です。

兵庫県の神戸市に、お父さん、お母さん、そして、3人の男の子の兄弟、の5人家族が住んでいました。3人きょうだいの名前は、小学校2年生の元気くん、1年生のようへいくん、2才になるしょうとくんと言いました。元気くんは、とてもめんどろみのいい1番上のお兄ちゃん、2番目のようへいくんと末っ子のしょうとくんを、いつもかわいがっていました。3人はよく公園に行って、サッカーをしてあそんでいました。元気くんと、ようへ

いくんはサッカーが大好きで、「大きくなったらサッカー選手になりたい！」と言っていました。2人の練習にはいつも末っ子のしょうとくんもついてきていて、ボールをおいかけていました。練習がおわって家に帰ると、お母さんのおいしいご飯がいつも食たくにいらんでいたのでした。毎日のようにどろんこのユニフォームをせんたくするお母さんは、3人のニコニコした笑顔を見るのが大好きでした。お父さんは、ばんご飯を食べながら、お父さんが子どものころ、サッカークラブでがんばっていた様子をじまん気に話していました！

このように、家族はいつもにぎやかで、幸せな毎日をすごしていました。



1月17日午前5時46分、大地震が家族をおそいました。「ドーン」という大きな音で元気くんは目をさました。すると、いつも部屋のかたすみにあるはずのタンスが、すぐ横にたおれていました。

何が起ったのかわからないまま、まわりをみました。上を向くと、目の前には天井がタンスに支えられ、とまっていました。

「なんかすごいことが起った」と元気くんは感じました。

近くに自分1人が通れそうなすきまがあり、そこか

らぬけだすことができました。外に出ると、いつもとちがう風けいが広がっていました。いつもあいさつしてくれるおばあちゃんの家がつぶれていました。まわりを見ても家族のすがたが見当たりません。元気くんは急に不安になりました。「お父さん、お母さん、・・・」

その時、「だいじょうぶか?!」というお父さんの声がしました。

「お母さんたちは?」 「今探してる」

すると、がれきの中から「たすけてー!」という声が聞こえてきました。

「ようへいだ!」

お父さんはがれきの中をあわててさがし始めました。

ようへいくんの足にはタンスがたおれていました。

お父さんはすぐにタンスを持ち上げて、ようへいくんをたすけました。

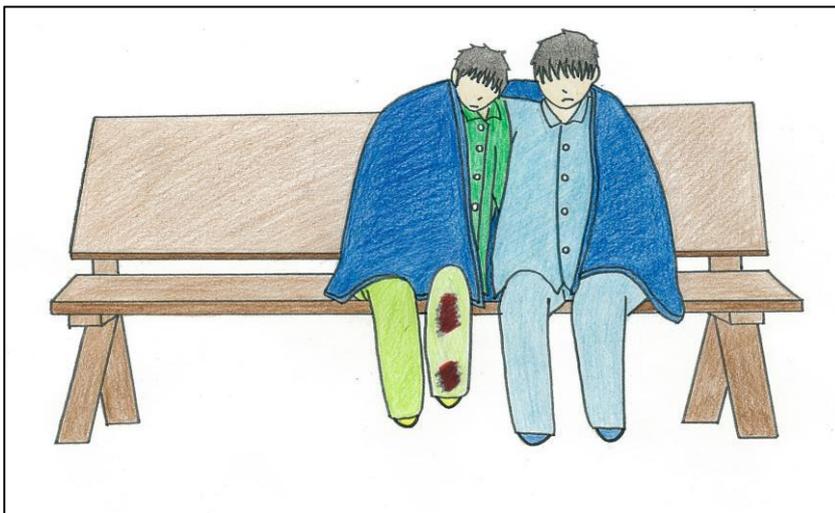
ようへいくんの足からは血がながれていました。

「ようへいだいじょうぶか?」「うん平気。おかあさんとしょうとは?」

「まだ見つかってない」それから、お父さんと元気くん、ようへいくんの3人は、お母さんとしょうとくんを探しました。

「おかあさん!しょうと!おかあさん!しょうと!」

返事がありません。元気くんは不安とあせりで、だんだん声が大きくなってきました。声がかれるまでさけびつづけましたが、返事はありませんでした。



どれくらいの時間がたったでしょう。ようへいくんの足からは血が出ていました。お父さんはようへいくんの足が心配だったので、2人を安全な公園に連れていきました。そして元気くんとようへいくんをベンチに座らせ、お父さんはお母さんとしょうとくんを探しに行きました。元気くんとようへいくんは、不安な気持ちをかかえながらお父さんの帰りをまっています。

気がつけばあたりはまっくらになっていました。しばらくするとお父さんがもどってきました。お父さんは目に涙をうかべて「あかんかったわ…」といいました。元気くんは、すぐになにがおこったのかわかりました。

「もうお母さんにもしょうとにも会えないんだ」いつのまにか元気くんも泣いていました。ようへいくんも泣いていました。お父さんは2人をだきよせました。3人はいつまでもなき続けました。





お父さんと元気くんとようへいくんの3人の生活が始まりました。お父さんは、お母さんのぶんも一生けんめいがんばりました。元気くんとようへいくんも、そんなお父さんのお手伝いをしました。お父さんのとくい料理は、元気くんとようへいくんの大好きなカレーでした。

「元気、これ運んで」

「うん、わかった！」

いつもご飯は3人そろって一緒に食べました。ばんご飯のあとは、せんとくものをたたむのが元気くんとようへいくんの仕事です。ふたりでどちらが

きれいにできるかきょうそうすることもありました。お父さんの仕事が休みの日曜日には、公園に行って三人でサッカーをしたり、雪がふった日には雪合戦をしました。おふろは銭湯に行き、背中を流し合い、お風呂上がりには牛乳をのみました。夜はさむいので、三人でよりそって寝ました。みんなで一緒にいることが何よりも安心できました。お父さんは家で塾の仕事をしていたので、たくさんの人が家にやってきて、さみしさを感じることはありませんでした。

ある日の夜、元気くんは夢をみました。人がたくさんいてにぎやかな公園で、家ぞく五人でサッカーをしている夢です。

「お兄ちゃんいくよ」

「こい、しょうと」

「えい！」

「めっちゃ、ええボールやな」

「将来が楽しみやな、母さん」

「そうね！しょうとも元気とおなじサッカーせんしゅになれるかもね」

お母さんは楽しそうにこっちを見ている。

元気くんは思いました。

(これが、ほんまの世界なんや。地震なんてなかったんや・・・)

楽しくサッカーをしていると、しょうとくんがけたボールが遠くに飛んでいきました。

元気くんがボールをとりにいってもどってきたら、お母さんがいません。

あたりが段々くらくらくなっていて、目をあけるといつものてんじょうが見えました。

となりにはお父さんとようへいくんがねていました。お母さんもしょうとくんもいません。

「あれは夢だったんだ」

きがつくと目にはいっぱいのおなみだがたまり、あふれ出していました。



大すきな学校にいくとどんなに悲しいこともわすれることができました。

「今日のきゅうしょくなんやとおもう？元気！」

「おれはあげぎょうざがいいな！」

「きなこぱんたべたい！」

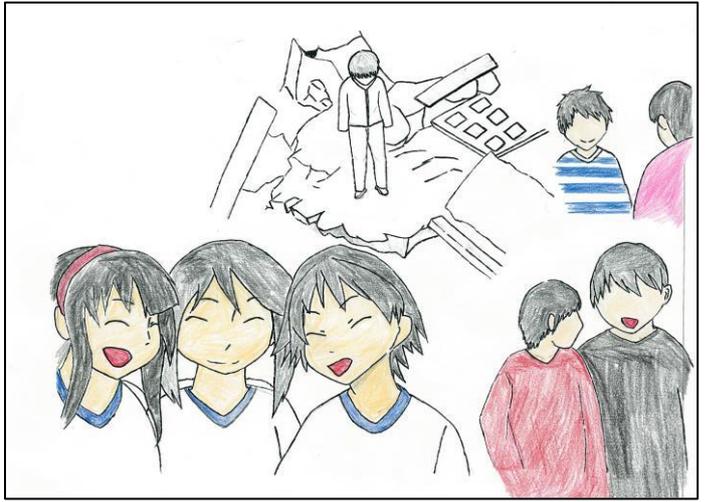
「きのうたべたやん」

こんなふつうの話も元気君には楽しい時間でした。

「きのうのあのテレビみた？」

「みたみた！おもしろかったよな」

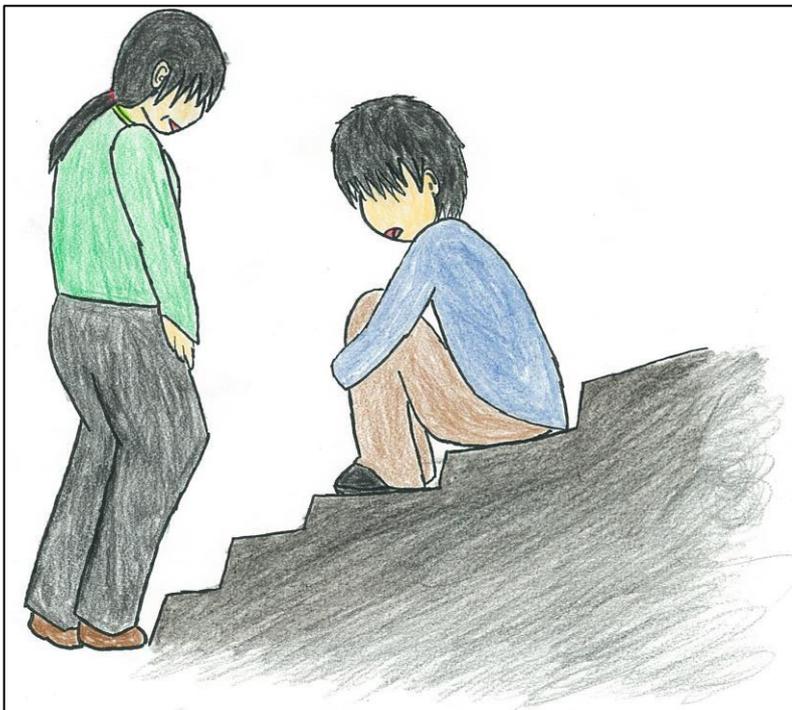
「おれはお母さんに宿題しなさいっていわれてみれなかったんだ。」



友達とのたのしいはなしもお母さんということばをきくと「ぼくにはもうお母さんがいないんだ・・・」とかなしくなりました。

「みんなでサッカーしにいこうぜ！」

たのしそうにあそんでいる友達を見ていたら、もっとかなしくなってきました。



元気くんはみんなの前で泣くのはぜったいいやでした。お母さんを思い出して悲しい気持ちになると、だれもないこうていの石だんにいって、こっそり泣いていました。

ぼくはひとりなんだ、そう思って泣いていると、いつの間にかたんにんの先生がよこにすわっていました。そしてやさしく声をかけてくれました。

「元気君ならきつとがんばれるよ。先生はいつもみてるからね。」先生のやさしい目を見てみると、涙がずっとひいていきました。休み時間が終わるので、元気君は教室に戻りました。「元気、おまえがいなかったから、サッカーまけたやん、次の時間は一緒にやろうぜ」

「そうやどこにいったんや」 元気くんは笑って答えました。

「おう、次の時間は一緒に行くわ」 みんなといると、元気くんは笑顔を取り戻しました。

「元気くんならきつとがんばれるよ」

先生が元気くんの悲しい気持ちに気づいてかけてくれた言葉は何よりも、元気君をゆうき付けてくれました。その時、元気君には新しい夢ができました。「自分もこまっているともだちによりそってあげれる、先生のような人になりたい」と思いました。

そして、元気くんは神戸でいま小学校の先生をしています。